

2024 年度イラン短期研修プログラム報告書

長崎大学経済学部総合経済学科 4 年

2025 年 3 月

1. はじめに

私は、2025 年 2 月 12 日から 23 日にかけて、公益財団法人笹川平和財団第 1 グループ（戦略対話・交流促進担当）主催の「イラン短期研修プログラム」に参加した。本プログラムでは、イランの首都テヘラン、かつてサファヴィー朝の都であったエスファハーン、さらにカーシャーンを訪れた。また、イランに向かう際、経由地であるカタール・ドーハにも半日ほど滞在した。各都市での視察や文化体験、そして参加メンバーとの交流は非常に充実しており、学びの多いものとなった。

私はもともと海外を訪れ、文化遺産を巡ったり、現地の人々と交流したりして異文化に触れることが好きで、これまでも海外渡航の経験があった。しかし、今回のプログラムでは、個人では訪れることが難しい機関や施設を見学する機会に恵まれ、非常に貴重な経験を得ることができた。

私個人の話にはなるが、2 年前の 2023 年、個人旅行で中東地域（サウジアラビア、ヨルダン、パレスチナ、イスラエル）を訪れたことをきっかけに、中東地域（特にパレスチナ地域）の情勢について関心を抱くようになった。帰国後、中東をベースに国際関係論を学ぶことに決意し、その後、運よく X で本プログラムの情報を見つけ、すぐに応募した。そして、無事に参加が決定した。

研修に参加するにあたり、私は現地で知りたい（聞きたい）ことをいくつか考えていたが、特に以下の点について関心を持っていた。

「現在、中東で起きているガザの問題、またイラン政府がハマースを支援していることに対して、現地のイラン人はどのような考えを抱いているのか。」

この問いを通じて、中東におけるイランのポジションや他国・親イラン組織との関係性を理解するとともに、私が大学院で研究対象としているパレスチナ問題に対するイランの見解を深く知ることができると考えた。

本報告書では、イラン短期研修プログラムを通じて得た私自身の気づきや学びを記録する。なお、本報告書の内容は、あくまで筆者個人の見解であり、所属組織や研修主催団体

の意見・立場を反映するものではない。

2. 「1つの物事を多角的な視座から考察する」

本プログラムに参加し、多くのことを学んだが、その中でも特に「1つの事象を多角的な視点から考察することの重要性」を実感した。この学びのきっかけとなったのは、SIRのイラン人学生とのディスカッションや、中東地域における最大規模のメディアであるアルジャジーラへの訪問、さらに日本のメディアであるNHK国際部の方との対話であった。

SIRのイラン人学生とのディスカッションの際、私は「現在ガザ地区で起きていることについて、彼らがどのように考えているのか、またイランがハマス（西側諸国がテロ組織として指定する組織）を軍事的・経済的に支援していることについて、どのような意見を持っているのか」を尋ねた。すると、質問を投げかけたSIRの学生全員が、「ハマスの行動は自国防衛のためであり、彼らは正義のために戦っている。イスラムの同胞として支援するのは当然のことだ」と、迷うことなく語った。この姿勢は、これまで私が接してきた情報とは全く異なる視点であり、強く印象に残った。同時に、異なる立場から物事を考えることの重要性を改めて認識した。

日本で生活していると、私が日常的に接する情報の多くは日本のメディアやABC、BBCといった西側諸国の報道機関を通じたものが中心となっていた。そのため、ニュースの視点がどうしても西側寄りになりやすく、それを当たり前のものとして受け入れてしまう傾向があった。しかし、今回のイラン人学生との対話を通じて、これまで触れたことのない視点、すなわちイランやロシア、中国といった国々の立場から語られる意見に直接触れ、多面的に情報を収集し、考察する習慣を持つことの大切さを痛感した。

このことに関連して、私はアルジャジーラを訪問した際、当機関の事務局長であるMostefa氏に「情報が溢れる現代社会において、より正確で偏りのない情報を収集するためには何が重要か」と質問をした。その回答として、「1つの事実に対して、より正確な情報を得るためには、多くの情報を比較し、照合することが不可欠だ。」ということを教えていただいた。自分が見ている報道や新聞で伝えられる事実を一面的に受け取るのではなく、さまざまな立場の情報を収集し、比較することで、より正確な理解に近づけるのだと実感した。

3. おわりに

今回のイラン研修プログラムを通じて、これまでの個人旅行では決して得られなかった、かけがえのない貴重な経験をすることができました。また、自分の専門分野に対して

情熱的で、探究心にあふれるメンバーと共に時間を過ごし、彼らと出会えたことに心から感謝しています。

このような機会を得ることができたのは、本研修プログラムを主催し、地方から東京への移動を含め経済的に支援して下さった笹川平和財団の皆様、現地でコーディネーターとして帯同して下さった穴田様、そしてイランについて熱心に教えて下さった SIR の皆様のおかげです。ここに深く感謝申し上げます。

なお、本所感は筆者個人の見解であり、笹川平和財団の公式な見解を示すものではありません。